

ヴォルテールとその哲学辞典について

岩 見 至

一

十八世紀フランスを代表する二人の思想家をあげよと云われたら、ヴォルテールとルソーを名ざすことにまず異存はないと思われる。この二人は友人として交渉した時期もあったが後に喧嘩別れし、本来性格も行動も全く対照的な人物であった。思想家としてはむしろルソーが深く、後世に及ぼした影響という点でもルソーが勝っている、と一般にみられておりそのことに反対なのでは決していないが、ヴォルテールにもルソーに劣らぬ関心を持たれてもよいのではないかと考えられる。深さが欠けているとゲーテもいった。しかしゲーテは、ヴォルテールが十八世紀フランス文化の一個人における集中的表現で

あることを認め、あらゆる才能を枚挙して彼に帰している。^①一方当のヴォルテールは、自分は小川のようなもので深くないから澄んでいるのだと深さの欠除は自認している。しかしフェルネーの長老として全欧に君臨する老ヴォルテールが、カラス事件を始めとして次々と、名もない無辜の人々のために、社会悪の被害者のために全精力を注いで戦いはじめるあのエネルギーがどこから出てくるか。そこに矢張り単なる文人にとどまらぬ哲学がある、といわねばならぬ。

十六、七世紀におけるカトリック再生の気運と新旧の何れを問わず宗教的信仰と実践がともかくも強力であった事情を考えると、何故ヨーロッパ文化が世俗化したか、その理由は簡単には理解しがたいとドーソンはい

③。そのことを理解する手がかりとして彼があげているのは、新しいカトリック文化とプロテスタント文化が安定しようとしていた決定的な期間に、西欧最大の国民国家が終始二つの宗教に分割されたままで居残ったということである。その国民国家とは勿論フランスのことである。結論的にいって、西欧文化の完全な世俗化の原因の一は合理主義的啓蒙にある。そしてその源は矢張りデカルトにまで遡り、下っては自由思想家達の道ならしがあったわけであるが、ヴォルテールほど徹底的に広汎に世俗化を推進した者は見当らない。宗教は個人の私見の問題となり、国家の公共生活と文化の知的共同社会が殆ど世俗化されたのである。この変化は革命的——フランス革命の結果だからでなく、むしろ政治革命以前に精神的革命は進行していた——といつてよいほどのものである。その意味でヴォルテールの果たした役割はルソーの建設的役割に劣らず重要なのである。

①ゲーテ訳「ラモーの甥」附註ヴォルテールの項

②新教徒カラス、息子が旧教に改宗するのを恐れてこれを殺したとの無実の罪で車刑に処せられ、ヴォルテールこれをきき憤激、あらゆる手段をつくしてついに高等法院の判決を取消させる。

③Christopher Dawson, The Movement of World Revolu-

tion, III.

二

周知のようにヴォルテールの著作活動は広汎多岐にわたっている。詩、劇、小説、歴史的作品、哲学的作品、老大な書簡と無数のパンフレットのうちに、特に前述の「世俗化」をおしすすめる上で力のあった「哲学辞典」(以下「辞典」と略称)に若干の考察を加えることとする。

彼がこの書物を書くかと思いついたのは、プロシヤ王の晩餐の席上で、一七六四年に最初の版が出た。その時の表題は「携帯用哲学辞典」であったが、版が更まると共に「アルファベットによる理性」と改題された^①。この第二の表題は内容を正確に特徴づけている。彼の他の著作の場合と同様、出版した場所はジュネーヴであり、ロンドンであり、アムステルダム等であった。之は自分の著作ではないと否認している間にも、かくれた配布者の手で到るところに撒きちらされたが、遂にパリ高等法院に焼却を命じられることになる。官憲側の本書に対する評語の中には、作者は無分別で放埒で不道德で破廉恥な猛獣であるといった罵言がみられる。それは逆に本書の

影響の強さを反映してもいるのである。

項目数は最初七十三項であったが次第に追加されて百十八。アルファベット順に並んでいる。

十八世紀フランスにおいては「哲学者」は特別な意味を持つており、この哲学辞典の意味もまた然りである。

見出しの項目には、愛・善といった徳目や天使・無神論・福音といった教義関係の項から終局因・イデーの如き哲学用語、更に戦争国家・法等の政治的社会的項目、個有名詞に至るまで各種のものが含まれ、「日本人の教理問答」なる項もあるが、狙いはすべて世俗化にある。辞典そのものが百科全書派の教理問答であるといわれる所以である。我々はこの辞典において、フランス大革命更には第三共和国の立法を鼓吹する主要な理念を、その源において把握しうる。それらの理念は一般的に共和的神学と呼ぶるものを構成するのである。これらの理念が共和的神学のうちに認められる限りにおいて、「辞典」のテーゼを三つの観点から考察したいと思う。即ち政治的観点、知的観点、いわゆる哲学的観点の三である。

① 携帯用哲学辞典 Dictionnaire Philosophique Portatif. アルファベットによる理性 La Raison par Alphabet. (版の異同の詳細は略す)

② 例としてAの項目をすべて列举する。

Abbé (僧), Abraham (アブラハム), Adam (アダム), Ame (魂), Amitié (友情), Amour (愛), Amour nommé Socratique (ソクラテスの愛), Amour-propre (自己愛), Ange (天使), Anthropophages (人喰い), Antitritaires (反三位一体論者), Apis (アピス), Apocalypse (黙示録), Arius (アリウス), Athée, Athéisme (無神論)

③ 体系的哲学説の建設を主たる目標とする職業哲学者でなく、あらゆる種類の著作活動を通じてあらゆる種類のテーマをとらえ現体制を批判する人々で、その立場は幅広いが要するに啓蒙の立場である。前代の自由思想家の流れをくむ。

④ 十八世紀は周知のように支那マニヤの時代と呼ばれた程で、東洋に対する関心乃至知識を、フランス各界の知識人はかなり所有している。ヴォルテールは日本のことについていえば、小説カンデイドの中でも「三箇所言及しているが、何れも断片的なもので(例えば踏絵のこと)かつ彼の中国に関する知識以上に正当さを欠いている。

⑤ la mystique républicaine. バンダ Julien Benda の表現である。Introduction au 'Dictionnaire Philosophique.' 以下彼の説を参照すること大である。

二

政治的な観点からみると第一に「辞典」のなかに民主

主義的平等主義の糸口がみられる。この言葉で「人間は平等な権利をもって生れ、そして生きてゐる」^①その原理を理解する。この主義に対立するものとして引合に出されるようなテキストがそう考えられるのは、平等主義に全部の水平化という意味を与えるからにすぎない。幕しの安楽な人は耕作に出かけないし、靴が一足入用なときにそれを整えてくれるのは請願審理官ではないとヴォルテールがいう時、彼はただ社会的機能の不等を認めさせるにすぎない。そのことの必要性はいかなる民主主義者も否定しないし、むしろ革截断工も絹ズボンの人士も法の前では同様の権利をもつことを望んだのである。民主主義的平等主義への真の対立、というのは生れや世襲が特権を与えるのを肯定することだが、そういうものは「辞典」のどこにも存しない。^③

にもかかわらず、都市では低級な仕事をする見すばらしい人々が必要だということをヴォルテールが認めそうであることは、はっきりしているのを否定してはならない。彼の言葉でいえば「何物をも所有せざる有用な人間」^④であるが、これは現代の民主主義者が組しないことであり、そんなことは機械化等によってやめたいことである。平等主義者ヴォルテールは階層的身分世界の没落

のうちに成長したが、その世界の社会的悲惨のいくつかを前にいくらか平静を保持した。いわば堅い大理石にほめこまれたままで彼は愛情の時代を開こうとする。

「辞典」の著者にきわめて親しく、民主主義神学の有機的な一項となる一つの原理は人格の不可侵性である。これが彼を直接に信仰の自由と個人主義とのドグマに導いてゆく。またこの原理はもう一つのもっと幅広い原理に根拠をおく、即ち人間として考えられた限りの人間、階級や機能の特殊性を考慮に入れない人間である。法官は王の助言者たる榮譽をもつが、従ってまた他の範とならねばならぬ。兵隊を勇気づけるのに、「お前は何々連隊のものであることを忘れるな」^⑤という。各個人に対しては「汝自らの人間性の尊厳を想起せよ」^⑥というべきである。この場合ヴォルテールは忘れられがちなあの八九年の宣言のひとつだりを予告しているわけであり、市民に権利のみならず義務のあることをも知らせている。

人間である限りにおける人間に対するこの尊敬は、現代の民主主義者によって人間の集団や国家にも拡張された。即ち国家がいかに卑小であろうと、人間存在によって構成されているというただそのことによって、より強力な国家から動物の群のように扱われてはならぬという

ことである。彼等は人權宣言の後にいわば國家權宣言を望んでいるわけだが、その点でも「辞典」は直接の鼓吹者である。普遍的な本質において、従って当然に人種的な差異をこえて人間性を尊敬することは、「辞典」の最も熱心な意欲の一で、それは他面からするとキリスト教から受けたものである。^⑦

何よりも彼を近代世界の先導者にするのは、彼のどこに基本的な特色を跡づけるかその場所であるが、立法権を抽象的理性や永遠のモラルの上に基づけ、慣習法や古い悪習に基づけたくないという意志がそれである。法律や条例や法規を統一したい希望もそこから出てくる。一七八九年にプロヴァンの貴族階級のノートにはこう書かれる。我等の代議士がなすべき行動の原理を見出すのはフランスの歴史のなかにではない、そこにあるのは國家の諸權利に対する無知と忘却だけだろうと。これで見ると教養ある貴族——かように歴史に対する批判者に攻撃を始めていた——は「辞典」の法の条りをいくらか暗誦していたと認められる。伝統的理論家が近代法を、それが歴史の上に理性を、ローカルなものの上に普遍性を押し上げる故に提訴するが、その訴えは直接ヴォルテールに立向うことになる。^⑧

その上ヴォルテールは歴史的多様性、人間性の諸面の變様を充分認識することを知っている。「習俗論」の終りの方で彼はいう。「慣習の帝國は自然の帝國よりはるかに広大である。それは習俗やあらゆる慣行の上に拡がっているし、變様を世界的な舞台に拡げる。自然は統一を拡げる。それは到るところで少数の不変の原理を確立する。従って地所はどこでも同じであるが文化は種々の異った結実をみるのである。」ヴォルテールが「辞典」のなかで浮彫りにし、敬意を払わせようと努めるのは到るところ同じその地所であり。少数の普遍の原理である。かように變化あるものをおとしめ、普遍的なものに味方することによって彼は近代民主主義の拒むべからざる張本人となるのである。

① 一七八九年の人權宣言第一条。

② 「辞典」平等の項

③ ヴォルテールは民事上のことで特権を拒絶する。政治的特権については「辞典」では何も云っていない。

④ 「辞典」平等の項

⑤ 「辞典」惡意の項

⑥ 同上

⑦ 彼のサン・ピエール師の企図に対する同意や普遍語のための誓などが考えられる。

⑧ ヴォルテールはこの点でルソーと不和であり、伝統主義者はそれだけ一層後者を圧迫する。

四

教会の聖職者が聖職者として、どんな国家内の権力を自由にすべきでないと考えるその意志を世俗主義と呼ぶなら、そのことによってもまたヴォルテールは近代民主主義の張本人といつてよい。もつとも彼の後裔達が、僧侶から政治的権力のみならず精神的行為をも奪取し、青年の教育を可能なかぎりとりあげようとして、師匠の考を犯したとみる人もあるかも知れない。僧侶が都市において何の権能も持つてはならぬとするならそれは大いに考えものだ、と書いてあるような教多くのこの師匠のテキストを思いおこす人もあろう。とにかくその時分以来、聖職者が、ボニファウス八世^②以来見られなかった、又一七六〇年代の反教権主義者に疑念の余地がなかった程の強力さを以て、市民社会に対抗して立上ったことを、よく観察する必要がある。教会の近代的な意図に対抗する市民的な権能の厳正さは、実質的に「辞典」の中に含まれている。一つの教会の宗規があるとするなら、他方ただ一つの市民社会があることを知るべきである、その他こういうことを理解させようとする「辞典」の何頁かが第三共和国の世俗法の母胎となっている。

「辞典」の著者は更に愛国心の概念によって近代民主主義者のパトロンである。彼は愛国心が肉体的であるより知的であることを、神秘的であるより合理的であることを望む。普通の愛国心が根底に異邦人に対する憎悪をいつももっていることを批難する^③。

政府が制御されうる国家、人は法にのみ従う国家も彼が好むところである。税法については、税は決して比例的なものであつてはならないと考える。その他平和主義、戦争有罪論等、種々の観点から彼が民主主義のパトロンであつたことがいえると思うのであるが、上の最後の戦争についての意見が直ちに二つの考を伴うことに注意しなければならぬ。その一つは常に偽りであつたし、次の一つは今では偽りとなつた。

第一の考は戦争は常に悪しきものであるし、又従来常にそうであつたということ。戦争が時として優秀な種族の勝利を保証することにより文明に仕える、というのは殆どすべての平和主義者がそうしたようにヴォルテールの直面することを拒む考である。彼の考によれば、もし戦争が文明に奉仕することが出来たということを認めるなら、再びそれが可能であることを認めなくてはならぬ。それどころか戦争はモラルの名において罰せられな

くてはならぬ。モラルは歴史などなくてよいのである。又次のようにも考える。戦争が勝利を保証した種族が非常に高度の文明をもつということは一向に証明されていない。我々の中にある悪しきものをひきはなしておいて、イロクワ人^⑦に比較して我々の劣等性を証明するといったパラドックスはヴォルテールに始まる。とにかくこれは彼でも彼の弟子達でもそうであるが次のような良い動機からでたことである。即ち、自慢だということをよく知っていながら、自分等は野蛮人よりも値打があると考えるその文明の傲慢を挫くことである。戦争は常に悪いという考につけたしてこういうこともある。どうにか生存してゆくために国家が支持した闘争の中には偉大なものがあつたということを認知することは不可能である、いやむしろ拒否せねばならぬと。彼のいうところを聞けばいつの時代にも、戦争には侵略、掠奪のみあつて、犠牲も偉大も何もなかったということである。しかしヴォルテールは答えるだろう、戦争を廃棄したいならいろいろの徳を認識すべきでない、道徳行為には心理学者の誠実さは要らないと。ルヌーヴィエ或いはルナンに至って始めて、歴史の意味を保持し諸国家の形成作用であつたドラマを尊敬する平和主義者を見出すことが出来る。防

禦戦争ならぬ攻撃戦争についても独特の反語で次のようにいう、防禦戦争^⑧というものは存在しない。防禦するのは攻撃するものと、より以上ではないとしても同等の戦争責任があると。

ヴォルテールの平和主義的外見を伴う第二の考は、戦争は王によって首長によってのみ欲せられる、人民は有機的に平和主義で決して戦争を望まないというものである。彼の時代はそうであつた。しかし今日では偽りとなつた。今では人民は一つの意志を持つており、中には好戦的な意志もないわけではない。結局、理念の宣伝のために妨害する現実を否定する批判的平和主義に對立させると、ヴォルテールのはいわば神秘的平和主義である。彼は又、産業文明を軍事文明に對立させる(スペインサー)人々の祖であり、戦争のロマンチスム流血の詩サーベルの叙情に對抗して立つ(ルナン、アナトール・フランス)人々の祖でもある。何人かの人間の氣まぐれが、何千という我等の同朋ののどもとを忠実にかき切る限り、ヒロイズムに捧げられた人間の仲間は全自然の中で最も恐ろしいものであらう^⑨。恐らく、相互虐殺が何人かの氣まぐれでなく、人民全体の意志によってなされなくなつたら、彼はこの命題をひっこめるだろう。

①「辞典」僧侶の項及宗教の項の第五回参照

② Bonifacius VIII (一二三五—一三〇三) ローマ法王、一二九六、教書を発して仏王フィリップ四世のフランス僧侶への課税に反対し、又ドイツ帝国に対して法王の世界支配的権利を要求した。死去の数年前フィリップ四世の使節に監禁されたこともある。

③「辞典」愛国心の項 ④「辞典」国家、政府の項

⑤「辞典」市民法と教会法の項

⑥ ルナン、スペンサー等に対する抗弁である。

⑦ 北米の赤色土着部族

⑧ この点に關し、彼の態度をはっきりさせる別のテキストもある。

「アレクサンドル六世と息子ボルジアがローマを侵略した時、——彼はこの怪物達に対して武装することを認められていなかったというのか。戦争をしかけたのはこの怪物たちだということが分らないのか。——確かにこの世には攻撃的戦争しかない、防禦戦争とは、武装盗賊に対する抗争以外の何物でもない。(A, B, C, II^e entrelien)」

⑨「辞典」戦争の項、尚ヴォルテールの戦争は内乱や、シャル一世を断頭台におくったような事件をも含む。

五

知的な見地からすると、十九世紀からフランスで盛になり、その源がこの「辞典」に発するように思われる一

つの態度は、形而上学に対する激しい嫌悪であり、もっと一般的にいえば実用科学の名において、具体的知見の残余から人類のために翻訳される科学のもつ無記的な思弁に対する嫌悪である。「この知性を、その本性が未知であるにしても諸科学の完成のために使用すべきだ。丁度時計屋がゼンマイの何たるかを知らずに時計のなかで使うように」^①と述べる時、ヴォルテールは明らかに第三共和国の創設者である実証主義者達を予告している。又「人間の義務は聖トマスやスコトスの注釈にありと信じている人々」や、事実に照合するほど「身を落さない」人々をこっぴどくやつつけるヴォルテールは、ルナンのまぎれもない案内者である。ルナンはその「科学の将来」のなかで、サンスクリットやチベット語の認識に対する最少の寄与でも真剣なものであれば、デカルトやカントのような形而上的思弁よりも人間に対して多くをなすといっている。更に形而上学は「魂の実験物理学のみ」あらねばならぬと教えるヴォルテールは知性の姿勢全体の先導者に任ずる。この場合もまた彼の後裔たちは師の考をポピュラーにはしたが、それを主権者となった群衆の要求に適應させたり変換したりしている。即ちある者はこの魂の物理学が魂の物質性を証明することを肯

定し、又他の者は実験心理学の口実でもって、全く、形而上学的な秩序の視野を提供しつづけるが、こういうものは科学の価値を欠いている。

その形而上学的秩序の中で、「辞典」は神学論争を蔑視する端緒となる。だがそれはヴォルテールの場合、後継者たち例えばルナンと違って歴史の情報、歴史感覚の豊かさと一緒になっている。ルナンの著「キリスト教の起源」の弱さは神学諸教義の歴史とそれがひきおこした闘争の重要性に關係がある点で「辞典」とは好対照をなす。

尚又同じ形而上学的秩序の中で争って人の求める松明のような次の考をともした。「哲学というものは専ら道徳のうちに、我々をよりよくし我々を慰めるもののうちにあらねばならぬと知ること」である。その「殆どこれも生の指導に影響のない」ような形而上学的問題は愚かであるともいうが、百五十年後に第三共和国の創立者が黑板に書くであろう公式に何と似ていることか。^⑤

- ① 「辞典」魂の項
- ② 「辞典」支那の項
- ③ 「辞典」神の項
- ④ 「辞典」物質の項
- ⑤ ヴォルテールを助けるのは、ここではデイドロであらう。

「哲学を真に人々の眼に賞讃すべきものとする方法は唯一つしかない。それが有用性を伴うのを示すことである。…哲学者を照すものと、民衆に役立つものは全然別の二物であることがわかっていない。悟性はしばしば損なうものによって照され、役立つものによって暗くされるから。」
(Diderot, Œuvres complètes, Philosophie, tome II, p. 154)

六

本来の哲学的見地からみると、ここに三つの簡条がある。歴史家が民主主義のカテキスムに欠くべからざるものであることを確認し、その根が「辞典」にあるといえるようなものがある。無神論、物質主義、必然なる進歩への信仰の三条である。神についてのヴォルテールの考えは理神論であるが、フランス人にとっては宗教は神への信仰を具体化するもの、それをいつも打ちこわすことにかかっていたから、不可避免的に彼等のうちにこの神信仰そのものの破壊をひきおこさなくてはならなかった。努めて物質的だと思わないようにしている魂、それが矢張り物質に支えられていることを欲する教義は唯心論の崩壊に連なるしかないことは明らかである。又彼は可能なる進歩への信仰を悪の無窮というカトリックのド

グマに対抗せしめようとしたが、確實性を渴望している群衆のうちにあってはそれは、必然なる進歩への信仰、進化の無意識的な知慧への信仰にならなければならなかった。楽天主義、人間の持ち前の善性に対する十九世紀の信仰もそうである。「辞典」の中にあるがどんなに他の人々に打消されたか。ヴォルテールが知ればルナンの言葉を繰り返すかも知れない、自分が何を基礎づけるのかは決してわからないと。

① モーロワは名において有神論、実において不可知論といっている。André Maurois, Voltaire, XII.

② 「辞典」迷信の項参照、ここでは、知的になったブルジョワジーが恐らく最も卑賤癡猛な下層階級の習俗でも和らげうるが、根こそぎ変革することは出来ないことを示している。

七

以上いわゆる民主主義神学を構成する主要な理念を「辞典」の中にみたのであるが、肝要なことは、それが集団の人間によって採用された限りにおいてのものであることである。そうでなければ公共の心の要素とはならないからである。実をいえば、それら理念の大部分はフランスでもヴォルテール以前に表明されたものであつ

た。専制政治批判はフェヌロンに、狂信に対する憎悪はベイルに、戦争の告発はモンテーニュに、形而上学の蔑視はガッサンディにみられ、そして人間の自然的平等は実にスコラ学の紋切型なのである。つまりヴァレリもどこかदैいていたように、こういう偉大な人間に帰する多くの理念は、人間の心のどこかで久しい以前から感じられていたのである。ただ誰かかきならす人があつたわけで、ヴォルテールはまさにその一人であつた。それらの理念が「辞典」において見出した読者はどこにひかれるか。理念の独立した堅実さ、何度も繰返されるその強烈な主張、独断の不在ということであろう。加えて抽象的理念に活気を与える著者の才能は特異である。無数の実例、種々の予期せざる、ユダヤからエジプトから、ギリシヤからゴール、トルコ、シナ、日本からという豊富さは美事である。

それにしても、武装せる宗教、流血の詩、英雄的行為のロマン主義、普辺的なものの蔑視、過去の迷信などに加える著者の激しい攻撃をみると、彼は一体誰に向つて怒りを浴せているのかと問いたくなる。一七六〇年には誰も、詩人さへも、戦争の神聖や国家的排他主義、理性の低下或は力の神秘、大地と死者の礼拝などを

諷いあげてはいなかった。こういうことは、ヘーゲル、ニイチエ、バレス、ソレル等に始まる。従って多くの頁でヴォルテールが発射する弾は、特に近代の人間に降りそそぐ感じがするがそれはこう説明されよう。ヴォルテールのテーゼが全き効率を発揮するのは十九世紀の終り、世俗の、つまり宗教と切り離された学校、反軍国主義的教義、国際主義的運動の出現と同時なのである。従って相手方の精神がかってない深さで自己を自覚し、教義の中にある防禦の器官をつくり出してゆくのもこの時期である。もっとも教義中の防禦器官のあとづけを、アンシャンレジームの最も鞏固な支持者——ボッシュエであろうとブルダルであろうと——のうちにも見出せぬから、ヴォルテールがそれらの教義を予見していたとすれば不思議な位である。ゲーテがどこかで、天才のしるしは死後に生ずる生産性だといっていたが、ヴォルテールはその著作の自然な拡がりによって、一世紀半おくらせてやっと敵対者が出現し、しかも彼等に既に返答を与えていたわけである。